

特集Ⅰ ニューガラスフォーラム 20周年記念

ご挨拶：独産業技術総合研究所より

「知」の創生に向けて ——(社)ニューガラスフォーラムに期待する

独立行政法人 産業技術総合研究所

理事・関西センター所長 請川 孝治



資源小国でありながら一億二千万を超える人口を抱える我が国が、精神的にも物質的にも豊かな文明を享受し続けるためには、付加価値の創生による「富」の生産が不可欠であり、戦後よりこの方、多くの先達はその努力をしてきた。

そもそも、「富」は、交通手段が発達していない時代には、シルクロードや大航海時代のように、中国、東南アジアから物（商品）を移動することにより得られた。近年のように交通手段が発達してくると、原材料や製品の移動が容易に行われるようになり、結果として、安い労働力のが集積している地域（国）に「富」が集積するようになる。更に将来になると、原材料は言うに及ばず、人・物・金が自由に動くようになり、「知」の集積するところに「富」が集積するようになる。

このように考えると、我が国が採るべき方策はただ一つ、「知」の集積をどうやって実現するかである。昭和60年に発足した(社)ニューガラスフォーラムは、当時の通商産業省生活産業局窯業建材課の指導の下に、新しいガラス材料を夢見るニューガラスのメーカー、ユーザー等の人々によって設立され、時代の変化を先取りした活動を行ってきた。

その活動は、平成13年から開始された(独)新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の「ナノテクノロジープログラム（ナノガラス技術）」にも継承され、来るべき情報化社会の基盤を構築するための光通信技術に関する「知」の集積を目指してきた。その拠点の一つである(社)ニューガラスフォーラムの大阪研究所が、私どもの(独)産業技術総合研究所関西センター内に設置され、これまでの4年間、旭硝子、日本板硝子 HOYA、日本電気硝子、日本山村硝子、岡本硝子各社と共同研究できたことは、本プロジェクトに参画している産総研関西センターの研究者（西井準治、福味幸平、北村直之、村瀬至生、安藤昌儀、山下勝、赤井智子）にとっても極めて刺激的であり、且つ、有意義であった。

透明で傷がつきにくく、熱的・化学的に安定であるというガラス本来の優位性を活かしつつ、更に高いレベルでの機能性をガラスに付与するためには、ナノレベルでの界面制御・構造規則性の解明が不可欠である。そのキーテクノロジーである、ナノ加工技術、ナノ粒子応用技術、ナノ細孔応用技術に関する研究が、次世代の光情報通信やデジタル家電の「知」の集積拠点を形成し、我が国の「富」の集積に大きく貢献するものと期待しております。

最後に、改めて(社)ニューガラスフォーラム 20周年を心よりお祝い申し上げます。また、この20年間に本フォーラムが多くの業績を挙げられてきたことに、深甚より敬意を表しますとともに、今後の更なる発展を祈念致します。